

パルチャ(八字)

朝倉敏夫

(あきつらとしお)

民族社会研究部

世

は「韓流」ブームという。ことに韓国ドラマの男優に熱中するおばさまたちの姿は、日本のひとつの社会現象として、さまざまに解説されているが、その相手役の女性の生き方に自分自身を投影させているのだろうか。

韓国ドラマに登場する女性は、そのほとんどが苦難にあうと、それは自分のパルチャのせいだ



「宮廷女官チャングムの誓い」のシーン

©2003~2004 MBC

という。パルチャは、古いのひとつ、四柱推命からきている。生まれた年・月・日・時の四木の柱のもとに運命を占う。この時、年・月・日・時のそれぞれを、漢字二文字の干支で表したところから、漢字では「八字」と書く。

「パルチャが悪い」といえば、ふうには生まれついで運勢がよいことを意味する。したがって、これは男性にも使われるのだが、すばらしい人生を手に入れるというよりは、もっと身近な生活レベルの幸福について、とくに女性についていうことが多い。

たとえば、結婚生活がうまくいかなかったか、夫に早く死なれたとか、その女性の周りで不幸なことが起ると、「パルチャが強い女だね」といわれる。いかに優しくはがらかな人でも、「パルチャが強い」のは性格とは関係がないから、直すことはできない。だから「パルチャが強い」といわ



街なかの雑居ビルに元々のマーク。ボサル(蕎麥)と称する古い店がいて、四柱のほか宮合(結婚の相性)、六爻(吉凶占い)、新占(家や墓の占い)などをみる 撮影:川上新二

れるのは、女性にはいちばん嫌なことである(興善花『濃縮パック コリアンカルチャ』三交社、二〇〇三年)。

しかし、韓国の女性は、たとえパルチャが悪くても、これを単に受け入れるということはないように思われる。苦難をうける人生であれば、それをあきらめるのではなく、きりかえてゆこうというたくましさがある。韓国のハルモ二(おばあさん)たちは、さまざまな苦勞をかりかえり、「私の人生は小説になるよ」といって、「身世打命」(身の上話を圓達に語ってくれる)。

私たちが韓国ドラマに魅せられるのは、日本人の生き方が軟弱になつていられるなかで、こうしたたくましさ、ポジティブな生き方を求めているからかもしれない。

かくいう私も昨年一〇月からNHK・BS2で放送している「宮廷女官チャングムの誓い」の日本版監修をしながら、この韓国ドラマにはまっている。一六世紀初頭、激動の時代、陰謀渦巻く朝鮮王朝の宮廷を舞台に、ひたむきに生きた女性、チャングムの物語である。(見のがした方は、ガイドブックがNHK出版から出ています)

「韓国人の心」(学生社、一九八二年)のなかで李御寧は、韓国文化を読み解くキーワードのひとつ「根」を「自分の内部に沈殿し積もる情の固まり」という。そして「根の文化とは、虐げられ、踏みにじられながらも、美しく、隠やかな、あの望ましい世界に絶対を実現される証のなかった心の世界」をめざしていく文化なのだ」と述べている。この「根」も、「パルチャ」のとらえ方と相通するものがあるように思える。